

小林力三物語



▲新潟まつりで繰り出す新潟商談所の和田閑吉会頭（行列の先頭左）と小林力三副会頭（右）



▲二代目力三、40代中頃。
連合青年団団長や会議所副会頭で多忙だった

三商店は前日までの嵐のような繁忙がまるで嘘のように、静寂につつまれた。たとえば満鉄からの撫順炭。月間で1万トンを超え、新潟鉄工など港内工場だけでなく、酒蔵元にも販売網を広げた。三池炭を扱い県内トップの敦井栄吉商店に迫るほどの勢いだった。それらが幻と消えたのである。かろうじて1937（昭和12）年1月から手掛けた練炭の製造販売だけが残った。

ところが力三の日々は戦前と変わらない。相変わらず多忙で、各地を飛びまわる。1947（昭和22）年6月、戦後復興を担うべく新潟県連合青年団が長岡市で結成され、初代委員長に力三が推挙された。翌48年10月、初の公選制で新潟県教育委員選挙が行われ当選した力三が互選で教育委員長になった。二つの肩書を駆使して今度は、国立大学誘致の県民運動の先頭に立ち、ついには49年7月新潟大学の開学を実現させたのである。

新潟大学（運動では北日本総合大学と称した）の誘致運動では、県連合青年団が提唱して「青年教養講座」のテキスト作りを実践した。形だけの掛け声でなく、テキスト作成には會津八一や相馬御風の門を叩いて執筆を頼み込み、画期的な講座テキスト集を発刊したのであった。

二代目の持ち味は右も左も、硬派も軟派もで、人脈が広く多彩なことにあった。人に接するとき予断を排して素直に相手の懐に入りこむ。なにより酒が好きで陽気な酒宴は延々。関東軍の将校とも盃を交わす一方、特高警察に狙われ発表の機会を奪われたプロレタリア美術作家らと親しく交わり彼らの作品を購入して、生活を援助した。村上出身の矢部友衛ら、戦前に買い集めたプロレタリア美術家同盟の前衛画家達の絵画約250点を1980年代、新潟市美術館に寄贈しているのだった。

経済評論家の三鬼陽之助が幹事役をした明治40年生まれの会が、東京柳橋の料亭「をぎの」を会場に毎年

開かれた。今里広記、森暁、小林宏治、守屋学治ら大物財界人に、愛知揆一、三木武夫の政治家や稲葉秀三も顔をだしたが、力三もこの会の常連だったのだ。また會津八一が新潟市南浜通りの北方博物館に住んだころ、気のおけぬ有志を集めて東洋美術の勉強会を「史談会」と名付けて開いたが、力三はそこにも常連で八一の炯眼（けいがん）に接したのだ。

1949（昭和24）年、和田閑吉が新潟商工会議所の会頭になったとき、力三は苅部長蔵とともに副会頭に就任。当時、新潟県と福島県が東京電力、東北電力を巻き込み只見川の電源開発問題で大ゲンカしていた。和田閑吉は東北電力会長の白州次郎を向こうに回して、ケンカ仲裁に動いたが、このとき和田会頭は小林力三に東京電力とのパイプ役を依頼した。それが契機になって力三は後々の原子力発電に縁を持ち、柏崎・刈羽への原子力発電所誘致運動につながる。誘致推進で連携した柏崎市助役今井哲夫（後に市長）は県連合青年団でのごく親しい仲間であった。

朝鮮郵船の船舶代理店だった関係で1959（昭和34）年には当時の北村一男知事に頼まれ、北朝鮮帰還事業を進める帰国協力会副会長・会長を務めた。帰国事業に反対の右翼団体や韓国居留民団の人々からは激しく非難され、海運関係の業務を小林力三商店から切り離すことを決める。こうして設立されたのが富士運輸(株)で万景峰号の代理店となった。74年を皮切りに幾度か北朝鮮を訪問し金日成主席とも面会したのだが、2002年、北朝鮮による横田めぐみさんの拉致事件が表面化した。「日朝友好に貢献しようと頑張ったのに、こんなことになるうとは…」と、衝撃と痛哭の思いであった。2006年夏、百歳を目前にして、二代目力三は波乱にみちた人生を静かに閉じた。

文・望月迪洋（「新潟研究」事務所主宰）